

平成二十九年 度 京 都 府 公 立 高 等 学 校 入 学 者 選 抜
前 期 選 抜 学 力 検 査

共 通 学 力 検 査

国 語

解 答 上 の 注 意

- 1 「始め」の指示があるまで、問題を見てはいけません。
- 2 問題は、この冊子の中の1～6ページにあります。
- 3 答案用紙には、**受付番号**を記入しなさい。氏名を書いてはいけません。
- 4 答案用紙の**答の欄**に答えを記入しなさい。採点欄に記入してはいけません。
- 5 答えを記入するときは、それぞれの問題に示してある**【答の番号】**と、答案用紙の**【答の番号】**とが一致するように注意しなさい。
- 6 答えを記号で選ぶときは、答案用紙の**答の欄**の当てはまる記号を○で囲みなさい。答えを訂正するときは、もとの○をきれいに消すか、それに×をつけなさい。
- 7 答えを記述するときは、丁寧に書きなさい。
- 8 答えの書き方について、次の**解答例**を見て間違いのないようにしなさい。

解 答 例

一 火曜日の翌日は何曜日か、漢字一字で書け。……………**【1】**

二 次の問い(1)・(2)に答えよ。

(1) 北と反対の方角として最も適当なものを、次の(ア)～(ウ)から一つ選べ。

……………**【2】**
 (ア) 東 (イ) 西 (ウ) 南

(2) 奇数を、次の(ア)～(オ)からすべて選べ。……………**【3】**

(ア) 1 (イ) 2 (ウ) 3
 (エ) 4 (オ) 5

二		一	問題番号
(2)	(1)		答の番号
【3】	【2】	【1】	答の欄
ア イ ウ エ オ	ア イ ウ	水 曜日	採点欄
【3】	【2】	【1】	

共通学力検査					
国 語					
受付番号					
1	2	3	4	5	6
得 点					

「字数制限がある場合は、句読点や符号なども一字に教える。」

一 次の文章は、ちばてつやさんが書いた本の一節である。ちばてつやさんは漫画家であり、大学で漫画について教えている。この文章を読み、問い(1)～(8)に答えよ。(18点)

(1)～(7)は、各段落の番号を示したものである。)

1 漫画は教わるものではないと、私は思っている。そもそも私自身が漫画家に描き方を教わったことがない。① 私は生徒たちに何を教えているのか。それはひとこと言えば、プロとアマチュアのの違いについてだろう。

2 ただ漫画を描くことが大好きという人なら、自分で描いて楽しければそれでいい。何をどう描けば楽しいか、それを十分に知っているのだから自分のために描けばいいのである。

3 けれど、その楽しさを、自分以外の人に伝えるにはどうしたらいいだろうか。それを考え出すと、漫画を描くことが途端に苦しくなる。せっかく面白い話を思いついても、それをどう読者に伝えるかで苦しみ悩む。読者を意識し出すと、自分の面白さ、楽しさだけでは前に進めなくなる。自分は面白いと思ってもつまらないと思う人がいるかもしれない。その人たちの興味を引き寄せるにはどうしたらいいのだろうか……。そんなふうに住苦しみ出したら、その人はプロへの一歩を歩み出したことになる。逆にいえば、描いていて楽しいというだけなら、その人はアマチュアなのだ。本人が楽しいと思う作品でも、ほかの人が見てわからなければ、やはりアマチュアである。もちろんアマチュアとして漫画を描くことを楽しむ選択肢もありだ。漫画を描けるお父さんお母さんへの子供たちの「評価」は高い。

4 ②、そうした趣味の範囲では満足できない、プロになりたいというなら、読む人をワクワク、ドキドキさせるにはどうしたらいいか、そこで苦労しなくては行けない。とても苦しい作業だが、それこそが漫画家という仕事なのである。

5 読者をワクワクドキドキさせるためには、何が一番重要なのだろうか。私は、まず描く人が「根」を張ることだと思っている。「根」というのは、漫画という花を咲かせるために必要な感性やアイデア、知識、教養のことだ。その根を自分という土壌の中にいかに張り巡らせるか。それが創作の根幹だと私は思っている。漫画家になるのだからと漫画だけ読んでいては、うわべの狭い世界のことし

【トへつく】

か描けない。いろいろな本を読んだり、映画を観たり、伝記や資料を調べて読み解いたり、それからドラマを見つけ、人生や哲学を感じ取る心を養うことだ。私の幼いころは、我が家が厳しい「漫画禁止」ということもあったが、そのおかげで漫画以外のたくさんの本を読むことができた。そこから得た想像力や感動が私の漫画家としての根っこ、ベースになっていると思っている。

6 文学も美術も音楽も、時に思いもよらぬ創作のヒントをくれるものだ。例えばムンクの「叫び」という有名な絵がある。あの絵は観る者にさまざまな感情を喚起させる。恐れ、悲しみ、苦しみ、疎外感……といった、ムンクはあの絵で何を表現しようとしたのか。そして、なぜここまで観る者の気持ちを動かすのか。そんなことを考え、想像し、感じる気持ちを育ててほしい。音楽も、同じである。詩情あふれるさまざまな名曲を聴いて感動する気持ちが持てなければ、漫画においても情けい描写はできない。あるいは好きな詩の一節に思いを馳せ、心に残る名画をイメージしてみる。そうした作者の心の軌跡が、漫画の線の一本一本を生かすとき、読者の心にも響いていくのだと私は思う。こんなことは漫画とは関係ないとは思わずに、好奇心のままにいろんな分野に耽溺してみることで、それが直接作品上に表れるわけではないが、たくさん世界に根を張っていれば、創作のヒントはあらゆるところから集められる。料理を作るのでも、いろいろな材料や調味料を持っていけば、ここではオリブオイルかな、バターがいいかな、それともチーズかなと選択肢が広がるうえに、意外な隠し味で読者を楽しませることも可能だ。塩しか持っていないければ、おのずと味付けは限られてしまうだろう。

7 考えてみれば私は、この九年間、学生たちに同じことを繰り返してきたように思う。漫画に限らず、たくさんの方に「根」を張りなさいと。これはどんな仕事についてもいえることだ。「根」を張っていれば、卒業後たとえ漫画とまったく関係のない職業に就いたとしても、その仕事に必ず生きると私は思っている。

(「ちばてつやが語る『ちばてつや』による)

注 ○ベース…土台 ○ムンク…ノルウェーの画家 ○耽溺…夢中になること

(1) 本文中の ない と同じ品詞の ない が用いられているものを、次の(ア)

(エ) から一つ選べ。…………… 答の番号【1】

(ア) あの人はやって来ない。(イ) 雨はまだ降らない。

(ウ) 浜には誰もいない。(エ) 風はそれほど強くない。

二 次の文章を読み、問い(1)～(7)に答えよ。(20点)

(1)～(6)は、各段落の番号を示したものである。

1 私たちが読者としてある作品を読んだときに、その中のある言葉や、登場人物のある行為に共感をもつことは、多くの人が経験することであろう。読書という経験の中にある共感が読者としての私たちに何をもちたらずのか、考えてみよう。

2 まず第一に、読者は読むことにおいて自らを「読む主体」と「語る主体」に二重化する。読むことによって読者は、たとえ束の間であれ自分自身から脱け出し、作者の導く世界に入ってゆく。読者は読書によって「読む主体」として自らを形成するのである。もちろんその本は作者によって書かれたものだ。従って、読む主体である読者は、本来は自分のものではない言葉を発することになる。それは、小説の語り手、自分とは違う存在であるはずの語り手の役を、自ら引き受けるということだ。つまり読者の中で読む主体と語る主体とがともに存在する、あるいはそのように読者は自らを二重化する。

3 この二重化の中で、読む主体が語る主体の視点を十分にとること、つまりは語る主体に共感することが、生き生きとした読書の条件の一つとなる。というのも、読書が成立するためには、作者が提示した作品という仕組みを読者がどれだけ引き受け、わがものとするかにかかっているからだ。読者は自らを読む主体と語る主体に二重化するといえ、語る主体は原初的には作者であり、作者抜きにはありえない。従って読者の中の語る主体とは読み手がその視点をとることができた限りでの作者である。読み手は直接的に作者の視点を取るのではなく、読む主体に内在化された語る主体、それも作者と読者の両方に関係する語る主体を通して作者の視点をとる。生き生きとした読書とは、読み手の中で語る主体が生き生きと動くこと、従って、読者の中で読む主体が語る主体の視点を十分にとることによって可能になるだろう。つまりは語る主体に共感することが必要なのである。

4 第二に、語る主体の多数性と重層性に私たちは注意しなければならない。小説ではふつう複数の登場人物が各自の行動をとり各自の発言をする。完全に同じという登場人物はいない。またその登場人物の多くは全体の語り手とも違う。確かに登場人物の一人が同時にまた全体の語り手でもあるという設定はある。その場合でも、他の登場人物は、語り手としての登場人物とは異なった存在として描かれる。にもかかわらず全体の語り手は個々の登場人物を包摂(統合ではなくとも)した存在である。こうして、語る主体の多数性とは登場人物の複数性であ

り、語る主体は複数の主体から成ることになる。またその重層性とは、全体を語る語り手と各自のセリフを語る登場人物との包摂の関係である。

5 従って語る主体への共感とは、個々の登場人物の視点に立つことであるとともに、全体の語り手の視点に立つことでもある。もちろん私たちは複数の登場人物の中で、共感できる人物もあれば共感できない人物もあり、それに応じて小説の理解が浅くも深くもなり、またさらに深い理解へ導かれてさえゆく。一方、全体としての語り手への共感とは、その作品を私たちにとって興味深いものとするだろう。語り手に共感できないままの読書は、たとえ登場人物の中に共感できる相手がいたとしても、その作品を読み続けようとする興味を薄れさせる。読書における語る主体への共感とは多数性と重層性において成り立つのだ。

6 こうして読む主体は、複数の主体から成る語る主体を内在化させ、そこへと一体化する。小説を読む経験は、そのような複数の主体を内在化させた空間の中で、各々の主体への共感や共感のなさを通して、読者を読む主体へと形成させる。つまり読む主体はいわば共同主体的に形成されるのだ。もちろん現実の世界は小説の世界とは違う。だが読書の経験における読む主体の形成と現実の世界の経験における共感的自己の形成とを、私たちはパラレルに捉えてよい。なぜなら、小説における登場人物の複数性と同様、現実世界においても、いや現実世界においてこそ主体の複数性・多数性があり、読書において語る主体の多数の声を聞きながら読む主体を形成するのと同様に、現実世界における共感の経験の中では多数の声かびく空間の中で私たちは自らを共感的自己として形成するのだから。

(山崎広光「共感の人間学・序説―概念と思想史―」による……一部省略がある)

注 ○包摂…一定の範囲の中に包み込むこと ○パラレル…二つの物事が並行するさま

(1) 本文中の ^aもたらす の活用の種類を、次のI群(ア)～(ウ)から一つ選べ。また、^aもたらす と同じ活用の種類である動詞を、後のII群(カ)～(サ)からすべて選べ。

- | | | | |
|-----|----------|-----------|-----------|
| I群 | (ア) 五段活用 | (イ) 上一段活用 | (ウ) 下一段活用 |
| II群 | (カ) 過ぎる | (キ) 泳ぐ | (ク) 着る |
| | (ケ) 渴く | (コ) 始める | (サ) 接する |

【10】 答の番号

【下へつづく】

(2) 本文中の 語る主体は原初的には作者であり、作者抜きにはありえない について説明したものと最も適当なものを、次の (ア) (イ) から一つ選べ。 答の番号

(ア) 語る主体は、読者と作者を結びつける作品という仕組みの一部であり、その仕組みを構築したのは作者であるため、語る主体の成立において作者の存在を欠くことはできないということ。

(イ) 語る主体は、小説を構成し作品として提示した作者自身であり、作品の中で作者の言葉を語っている存在であるため、作者以外が語る主体となることは考えられないということ。

(ウ) 語る主体は、根本的には作者が生み出した存在であり、語る主体の視点は作者の視点そのものであるため、読者が読書において作者の視点を無視することはできないということ。

(エ) 語る主体は、読書を成立させる共感という仕組みの要点であり、その仕組みは作者が語る主体の視点に立つことで作り出されるため、読者が作者に共感しない状態はありえないということ。

(3) 本文中の 語る主体の多数性と重層性 に関して、次の問い ①・② に答えよ。

① 次の文は、語る主体の多数性と重層性 についてまとめたものである。
X ・ Y に入る言葉として最も適当なものを、後の (ア) (イ) からそれぞれ一つずつ選べ。 答の番号

語る主体の多数性とは、登場人物が複数存在しているということであり、語る主体の重層性とは、 X を包摂した Y が存在するということである。

- (ア) 複数の読み手 (イ) 全体を語る語り手
(ウ) 複数の登場人物 (エ) 全体を統合する作者

② 語る主体の多数性と重層性 と、読書における共感との関わりについて述べたものとして最も適当なものを、下段の (ア) (イ) から一つ選べ。

答の番号

(ア) 各登場人物の言動に興味を持てるかどうかは、読者が語る主体の視点を複数とることに反映され、全体を統合する作者の視点に立てるかどうかは、読み手が作品を深く理解して読み続けることに関係する。

(イ) 複数の登場人物のそれぞれの言動に共感できるかどうかは、読者が各登場人物の言動を理解する深さにつながり、全体を統合する作者に共感できるかどうかは、読者が作品への興味を深めることに反映される。

(ウ) 個々の登場人物の視点をとって言動を理解できるかどうかは、読者が作品を読み続けるための興味の深さに影響し、全体を語る語り手の視点をとれるかどうかは、読み手の作品に対する理解の深さを決定する。

(エ) 複数の登場人物のそれぞれの視点に立てるかどうかは、読者の小説に対する理解の程度を左右し、全体を語る語り手の視点に立てるかどうかは、読者が作品に興味深く読み続けることに影響する。

(4) 本文中の 注意 の熟語の構成を説明したものと最も適当なものを、次の I 群 (ア) (イ) から一つ選べ。また、注意 と同じ構成の熟語を、後の II 群 (カ) (ケ) から一つ選べ。 答の番号

I 群

- (ア) 上の漢字と下の漢字が似た意味を持っている。
(イ) 上の漢字と下の漢字の意味が対になっている。
(ウ) 下の漢字が上の漢字の目的や対象を示している。
(エ) 上の漢字が下の漢字を修飾している。

II 群

- (カ) 思考 (キ) 洗顔 (ク) 熱心 (ケ) 出納

(5) 本文の段落構成を説明した文として適当でないものを、次の (ア) (イ) から一つ選べ。 答の番号

(ア) 1 段落では、筆者がこれから述べようとしていることについて話題を提示している。

(イ) 2・3 段落では、1 段落で提示した話題について順を追って説明している。

(ウ) 4・5 段落では、1 3 段落で述べた話題とは異なる、新しい話題についての考えを展開している。

(エ) 6 段落では、5 段落までに述べた内容を発展させてまとめている。

裏へつづく

